

私と野球1（小学校卒業まで）

物心がついた頃（まだ小学校に上がる前）には、近所の先輩方と、原っぱで、木の枝をバット代わりに、石や平たい木の板をベースに、ソフトテニスのボールを打って走って遊んでいた。ルールなど何も分からない。ただ、ボールを打ったら走って、ベースを1周回ってくれば点数が入った。人数が少ない時は、走者にボールを当てればアウトになった。ファールも何本か打つとアウトになった。その時々で都合のいいルールを決めて、野球らしきものを楽しんだ。

自分が住み始めたところは、秋田市でもまだ未開発のところで、広大な土地に数軒の家しかなかった。当時の人々は、通称「新開地」と呼んでいたところである。同期の男の子がほとんどいなかったのので、1つ2つ年上の先輩方に交ぜてもらって遊んでいた。

小学校に上がった頃、クラス対抗で野球の試合をしようという事になった。学校行事としてではなく、あくまで自分たちで勝手にチームを作ってである。誘われたのでその気になっていたが、困ったことが発覚した。それは、私以外みんな銘々が、自分の好きなデザインのユニフォームを着て遊んでいたからである。しかも軟式野球用のグラブやボール、数は少ないがバットも持っていた。道具は何とか借りられそうだったが、さすがにユニフォームは自前で準備しなければならなかった。

母親と一緒に、当時秋田で最も有名な木内デパートへ行った。滅多に行くところではなかったので、驚きと緊張感しかなかったが、とりあえずジャイアンツカラーのユニフォームと帽子、紺色のアンダーシャツ、慶応カラーのストッキングは用意した。試合当日、アンダーソックスやベルトなどの必需品が無いことに気づくが、当時はそれが必需品ですら分からなかった。とりあえず白い靴下と、適当なベルトで出かけていった。ここまではよく覚えているが、試合がどうだったかは、まるっきり覚えていない。

余談になるが、ユニフォームを買いに行った木内デパートは、私にとってはとても敷居の高い所だった。最高級の品を扱っているということは幼心に記憶はしていた。遠足などで持っていくおにぎりを、木内デパートの包装紙にくるんでいくだけでクラスメートの目つきは変わったし、優越感に浸れた。鮭やたらこの何でもない母親のおにぎりまでが、高級品に変わった。

ユニフォームを買ったあと、母親は最上階の食堂に連れて行ってくれた。これまた驚きであった。何を食べようかと迷っていたら、母親は五目中華そばを注文した。結局私は珍しくもないカレーを注文したが、母親はそれをカツカレーに変更した。

間もなくして、五目中華そばと銀色の楕円形の皿に盛られたカツカレーが運ばれてきた。スプーンにナイフとフォークまで紙にくるまってテーブルに置かれたが、結局スプーンしか使わなかった。カレーの味はよく覚えていな

いが、母親が美味しそうに五目中華そばを食べていたのは覚えている。

食事が終わってほどなく、全く予想しなかったが、ソフトクリームが銀色の食台にのって運ばれてきた。食堂で食べる恐らく初めてのソフトクリームであったと思う。食台にのったソフトクリームの形は鮮明に覚えているが、どんな味がしたかはよく分かっていない。しかし、母親がその様子を優しく見守っていてくれたのは覚えている。

小学校4年生の頃、学校が終わると毎日のようにグラウンドに行って野球部の練習を見ていた。別に興味関心があったわけではない。家に帰っても両親は共稼ぎで誰もいないし、4つ下の弟は保育所に預けられている。半分暇つぶしのようであった。

秋も深まった頃だったと思うが、野球部の選手が体育館でポートボールをやっていた。練習の一環だったと思う。それも見ていたら、当時の野球部の監督の長谷川先生と一緒にやらないか、と声を掛けられた。運動は嫌いではなかったし、時間もあったので参加させてもらうことにした。

後に知ったことだが、長谷川先生は特殊学級の先生だった。ロマンスグレーのスポーツ刈り、お腹はふくれたふぐのようであり、手のひらが大きく、正にグローブのようであった。放課後に先生のクラスによく遊びに行った。クラスの生徒とも仲良くなり、同じ野球部の先輩もいた。先生はとても優しくて私のこともよく面倒を見てくれた。

小学校の5年生になり、正式に野球部に入部した。とは言っても、野球のことは今ひとつよく分からなかった。とにかく見よう見まねと、長谷川先生に言われたように動くだけ、だったように思う。

典型的な例が1つある。練習試合のある場面。私はいつの間にか捕手をしていて、ツーアウト、ランナー1塁、3塁。このケースで1塁走者が盗塁をした時は、セカンドベースに投げたボールを二塁手がカットして、3塁走者がホームに向かって走ったら、二塁手がカットしたボールを捕手に投げて走者をアウトにする、という練習をしてきたが、それを試す場面が訪れた。

何球目だったかは覚えていないが、1塁ランナーが2塁へ盗塁した。私は教えられたとおり、素早くボールをセカンドに向かって投げた。3塁ランナーはこれを見てホームへスタートを切った。それを見た二塁手の藤垣君は、セカンド送球のボールをカットして、ホームの私の所へ好返球してくれた。タッチアウト！みんな大喜びでベンチに引き揚げてきた。試合の勝ち負けよりも、練習してきた成果がもの見事にあたったことが嬉しかった。先生の教えは凄かった。その長谷川先生は間もなく体調を崩して入院してしまった。

長谷川先生に代わって野球を教えてくれたのは中村先生である。普段話す声は小さくてなかなか聞き取れなかった。古い帽子をかぶっていて、たまに長靴を履いてきたので、農家の人かなとも思った。表情は硬くて、一見とて

も怖そうな先生だった。笑った顔はほとんど見たことがない。ところが先生はよく野球を知っていた。それに加えて選手のことをよく見ていた。選手の考えていることが分かるくらいだった。ボールとバットの握り方、グローブの使い方、道具の手入れの仕方など、基本的なことから技術的なことまで、いろいろと教えてくれた。先生は何の目的か分からなかったが、ある時肉の重さを量るような計りを持ってきて、バットの重さを量り始めた。分かったらそのバットに緑色の油性マジックで「〇〇〇g」と書き入れた。恐らく、自分に合ったバットの重さを知っておくべき、と欲していたことだと思う。購入する時の目安となるだろうから。

私が気に入って使っていたバットには「DARK HORSE」とメーカー名が記されていたが、中村先生がそのバットの重さを量ったら重さは650gであった。同じメーカーのものが何本かあったが、少しずつ重さは違っていた。私にはその650gのバットが丁度良かった。当時から道具はグローブ以外は学校の道具だった（自分のバットを持っていた人もいた）。管理する意味もあったのかも知れない。ある時中村先生に呼ばれた。「家にバットはあるのか？」といつもの小さい声で聞かれたが、「ありません」と恥ずかしかったが、正直に答えた。すると、「いつも使っているバットはどれだ？」と聞かれ、いつも使っていたバットを探して持ってきた。先生は品定めをするかのようにバットを眺めたり、握ってみたりしてから、「これを持って帰っていいから、毎日バットを振るんだぞ」と言って渡してくれた。突然のことで驚いたが、とても嬉しかった。確かにそのバットが気に入っていたし、打撃練習の時も試合の時もいつもそのバットだった。それから毎日そのバットを持ち帰っては素振りを繰り返した。手の皮がむけて血がついた時は大変だと思ってしっかり拭いた。家の前の街灯の下で自分の影を見ながら何本となく振っていたように思う。中村先生がなぜそうしてくれたのかは分からない。物欲しそうに見ていたからか、全然打てないからか、成長することを期待してくれたのか、全く分からない。そんな先生も体調を崩して入院してしまった。当時から、野球を教えることはかなりの重労働だったのだろうか。

その後を引き継いでくれたのは学校事務の浅野さんである。まさか2人も監督が交代するとは夢にも思わなかったし、一番びっくりしたのは当の浅野さんだったと思う。でもよくやっていただいた。浅野さんとは、私が教職に就いたので、大人になってからも何度かお会いしているし、その度に当時の野球の懐かしい話をしている。浅野さんの指導は短期間だったが、一生懸命ノックをしていただいた。身近でボールを渡す時、顔中汗だらけで、必死になって狙った所へ打とうとする姿がとても印象的であった。

さらに、監督は4人目になる。当時私のクラス担任だった高橋先生である。先生は体育の先生であったが、専門は陸上競技だったように記憶している。

卒業文集に先生が疾走している分析図を書いていたので、その記憶からなのだが。先生は私たちを指導したあと秋田大学教育学部附属小学校でも野球を教えられ、好成績を挙げられたと伺っている。

高橋先生は当時の私たちのチームにとっても期待していた。体格のいい3人（私を含めて）に加え、野球センスのいい選手もそろっていた。でも不安要素も沢山あったと思う。私は当時、大会のことなど全く知らなかった。どの試合が練習試合で、どの試合が公式戦で全国大会につながるのか、正直全く知らなかった。大会とか、優勝とか、そういうことが学校行事以外であることは、本当に恥ずかしい話だが、全く分からなかった。なんのために野球をやっていたのかすら、今考えても全く分からない。長谷川先生に誘われなければ、野球との出逢いもなかったと思う。あとで聞いた話だが、小学校3、4年生の担任だった伊藤先生は、私が5年生になったら、サッカー部へ誘うつもりだったらしい。私の人生は全く違ったものになっていたかも知れない。人生何が起こるか分からない。

そんな中で、私が6年生になった時、恐らく一番権威のある大会が、本校（私の母校は川尻小学校）で開催された。運悪く小雨の中の試合だった。相手は日新小学校。この小学校がある新屋地区はとて野球のさかんな地区で、子どもたちはその環境の中で強くなっていた。うちは前評判が高かったせいか、研究され尽くされていた感がある。相手投手はストレートはボールにして、ほとんどカーブでカウントを稼ぎ、勝負球もカーブだった。うちはほとんど打てず、チャンスもなかったような気がする。相手はこの試合のために練習してきたようだ。点差は分からないが、かなりリードされていた。うちのエースも良かったが、小雨が気になってか、いつもの調子ではなかった。本来ならば完全試合でもできるぐらいの投手だった。サイドハンドから投げるボールは威力抜群で右打者のインコースにくるシュートは、正にカミソリのような切れ味だった。このボールに相手は全く手を出さなかったが、それがみなボールの判定。結構フォアボールやデッドボールがあって、向こうは労せずして点数を重ねていった。この試合は負けてしまったが、今でも強く印象に残っていることが2つある。

1つめは前々監督の中村先生の心遣いである。先生はまだ体調が悪かったが応援に来てくれていた。先生の心遣いというのは、次のようなことである。この試合、前述したように、相手はなかなか甘いボールを投げてこなかったうえ、やたらとコントロールが良く、アウトコースのカーブはほとんどぎりぎりに決まっていた。それを打つためにはバッターボックスの前ぎりぎりに立たなければいけなかったと思う。ところが右打者のバッターボックスは前の方がくぼんでいて水たまりになっていた。それで後ろに下がって打たざるを得なかったため、アウトコースのボールは余計に遠くに見えて手が出なかった。当時、グラウンド整備などトンボを引っ張るぐらいしかやったことのない小学生である。今思えばとても恥ずかしい。私の3打席目だったと思

うが、中村先生が、打席に入ろうとする私に「何か気になるか」と尋ねてきた。「はい、バッテリーボックスの水たまりが」と話したところ、中村先生は球審にタイムをかけ、高橋先生と何か話した上で、スコップを持ってきて水たまりの水を抜き、私たちの座っていたベンチの下の乾いた土を水を抜いたくぼみに入れ、固めてくれた。そのバッテリーボックスに入ったところ、相手投手もボールも大きくはっきり見えた。わずか数十センチの差であったが、何となく打てそうな気がしていた。何球目かは覚えていないが、やや甘めに入ってきたカーブを強振。打球は左中間のホームランラインを超えていった。ベースを一周する時、嬉しいという感情は全くなかった。『後悔先に立たず』というが、最初から自分で穴を埋めて打たなかった事を後悔し、恥じていた。ベンチに戻ったとき、みんなが笑顔で迎えてくれた。中村先生に「ありがとうございました」と礼を言った。先生は、表情こそ崩さなかったものの、褒めてくれているようだった。点数はこの1点だけで、試合は負けてしまった。今さらだが、この試合の重みを知り、1つ1つ丁寧にやるべきだったと今でも後悔している。本当に良いチームで力もあったから余計である。

2つめは全く私事の些細なことである。この試合は大きな大会につながる予選という事もある、結構な数の応援者や観衆がいた。私の家は両親共稼ぎで休日もなく働いていたので、今朝も仕事に出ていた。ホームランを打って3塁側のベンチに戻る時、グラウンドの外の道路上で、バイクに跨がったまま、金網越しに試合を見ていた、黒い雨合羽を着た人を見かけた。父である。一瞬で分かったが、工作中なのにと考えた。家に帰って聞いたら、『ちょっと仕事で、会社を出たついでだった』らしい。どんな理由であれ、滅多に無いことだったので嬉しかった。

この年（川尻小6年生）の秋、浜田小学校の親善試合に招かれた。何度か対戦していたが、過去に負けたことは無かった。そのせいなのかどうかは分からないが、浜田小学校のグラウンドで、秋晴れの良い天気の下で試合は行われた。試合はこれまでに無く拮抗して、最後は負けてしまった。浜田小ナインは大喜びであった。そんなにショックは無かったが、負けたのは悔しかった。

驚いたのはその数日後である。ただの小学校の親善試合だったが、その試合について、浜田小学校の野球部のキャプテンだった相原徹君が書いた作文が掲載されたのである。新聞の紙面の左上、四角い枠囲みで真ん中に『宿敵川尻小を破る！』の見出し（小さい写真もあったかな）。びっくりした。相原君は、川尻小を倒す事を目標に頑張ってきて、それが達成できて嬉しかったと綴っていた。全く意識はしなかったが、秋田市内で川尻小は、少々注目されていたチームだったらしい。

世の中の縁とは不思議なもので、中学校で私は、この相原君とチームメイトになるのである。（つづく）